別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　高 熙卓

本論文「近世日本思想における公共探求」は、徳川時代・１７世紀末から１９世紀半ばにかけて生み出された、世の運営に参加・実践しようとする思想的言説を〈公共〉を模索・構築する営みととらえ、これを伊藤仁斎、荻生徂徠、石田梅岩、安藤昌益、本居宣長、二宮尊徳の６人の思想の分析により解明した研究である。

従来、徳川期の社会思想史・政治思想史は、近代化をもたらす政治主体を見出すという角度から捉えられ、「公」意識の形成や、それに対する民衆意識の対抗といった道筋で捉えられることが多かった。これに対して本論文は、これは様々な社会各層からの〈公共〉参加の言説の展開として捉えるべきだとし、その多様な変遷を上記６人において位置づける。

序章では、以上の問題設定および〈公共〉についての概念規定をする。そして、朱子学が近世における公共探求の言説の下敷きになったが、これを踏まえながらも、その主体確立の構図が変容させられた（変容する社会背景が近世日本にあった）として、以下の本文の展開を導く。

第一部「「自然」から「人為」へ――儒学的構図の再編」では、〈公共〉探求問題を近世前期から中期に至る時期から儒学者の経学（儒学テクスト学）のうちに取り上げる。第一章では、伊藤仁斎において、人情にもとづく生活世界に公共形成の現場が求められたこと、しかもそれが共同体的な親密圏を越えて広い他者に開かれる対話的・協働的公共探求であったこと、その王道（政治）論がこの生活世界的人倫の民生を育むものとして再定位されたこと等を説得的に述べている。次いで第二章では、荻生徂徠について、経済社会化の進行と社会組織の肥大に伴って、人の個別直接的倫理関係を越えた領域があらわれてこれに対して制度政策ほかをもって対処すべき責任・課題が生じ、そこに徂徠の公共論の主眼があったとする。徂徠の公共構築論は、社会的には、当時の武士政権の政治手法に対する批判的な乗り越えの動きである一方、庶民層の主体化を封じ込めようとするものであり、それは、「天」を援用しつつ、民生を育むことを理念として、政治的な徳性をもつ人々と制度とを作り出そうとするものであった。そしてこのような徂徠の議論が、民生論において仁斎を引く側面があること、さらに現実の徳川体制を相対化するような国家構想に繋がっていることを適切に指摘する。

第二部「「自然」再発見による参加と批判――儒学的構図を越えて」では、儒学的構図に必ずしも捉われずときにはこれを批判する形で各社会層から出てくる、近世中期の〈公共〉

探求の言説を扱う。まず、このような公共探求は、経済社会化がより進行する中期段階に応じて出てくるものであり、儒学および他の諸言説を取り込みながら、自然や超越者に新たにアクセスする仕方で行われたことを指摘する。第三章では、石田梅岩が、町人の世界を背景にして、徂徠のように経済社会の抑圧によるのではなく、むしろその担い手（町人・商人）を社会に位置づけるべく公共構築をはかっていること、また他者への協調に収斂してしまいがちな仁斎的構図を越えて、庶民の自立的な主体化を図っていることを描き出している。第四章では、安藤昌益が、農民の世界を背景にして、徂徠的な「作為」のパースペクティブを反転させ、従来の体制や教説をラディカルに批判する地点を獲得すると共に、あたらしい自然観にもとづいて、平等な主体によるユートピア的な公共論を形成している、とする。ただし、昌益の土着主義が隘路に陥ったり議論が独善化したりする側面があることも指摘している。

第三部「「神為」と「人為」の構築――近世後期における生の再編」では、近世後期になって世の矛盾が深まるとともに、仁斎・徂徠の問題意識を踏まえながらの再度の人為化の営みが起こるとして、本居宣長および二宮尊徳の公共探求論を取り扱う。第五章では、宣長が、仁斎以来の「情」を基礎にしながら、それを実存的感情として深化させつつ「みやび」「もののあはれ」によって、自己を有限化しつつ共同体感情を受容・喚起すること、それが、宣長なりの〈公共〉探求となっており、新たな日本的経学の構築にも至っている。しかしそれが結局、神道的「自然」（「神為」）世界を絶対化し、皇統中心の国家の物語に収斂している、と指摘する。第六章では、尊徳が、農村や各藩の経済・生活の崩壊に直面して、ただ自然に委ねるのではない、人為的な自治・自活の営みを立ち上げそこに持続可能な自他共生を構想していること、と同時にその次元において、新たな天道や神があらわれていることを捉えている。

最後に終章では、全体を振り返るとともに、横井小楠にふれ、覇道的な世界秩序を乗り越えようとするその普遍的〈公共〉構想（「天地公共の実理」）が、現代にも意義をもつことを述べる。

以上のように、本論文は、徳川期の多くの思想家の営みに立ち入りながら、これを総合的に論じた労作である。各々の分析は、膨大な研究・史料を踏まえて、的確に行われており、筆者の研鑽が窺える雄編になっている。とくに、これまで個々に研究されて来た対象を、〈公共〉探求という観点から、一貫してとらえたこと、この視点のもとに、近世における言説の流れ・段階を説得的に把握していること、社会各層の多面的な言説を複合的に論じて全体像を提示していること等は、本論文にして始めて行われた仕事として、高く評価できる。また、そこに込められた〈公共〉理論とその問題意識も首肯できるもので、それが思想史研究と結合していることも重要な特長だといえる。各論においては、とくに伊藤仁斎・荻生徂徠論が重厚な仕上がりを見せており、個別研究としても、高い完成度をもつ。

他方、いくつか問題点も残る。用語において、「超越」「普遍」といった概念に曖昧さが見られる。「生活世界」概念も重要な割に無規定である。これらはもっと明確化すべきだろ

う。公共形成の「下から」「上から」という議論が散見するが、そこにやや未熟さが残る。また、全体の流れ・図式設定において、朱子学的構図からの変容をもって論を出発させているので、朱子学を基礎にする公共探究の流れが背後に隠れてしまうと共に、最後の小楠論が唐突になっている。これも、朱子学の公共構築面を書き込む必要があっただろう。また、とくに丸山真男の研究の把握がやや単純である。――このようにさらに論の展開が望まれる点もある。しかし、これらは瑕瑾であって、本論文の全体としての意義を損なうものではない。

本論文は、まず、近世日本の重要な諸思想に対して包括的に取り組み、それをまとめ上げた仕事として優れているが、これを公共探求論の観点から一貫して取り扱った点もこれまでにない創造的な仕事である。このような点から、審査委員会は、本論文は、当該研究分野において画期的な地平を開くものであり、博士（学術）を与えるにふさわしい業績であると認めた。